

ハムレットの第四独白

「第一行目」の解釈を巡って

村里 好俊 (イギリス・
ルネサンス文学)

舞台上の1564-1616 (生没年) と実行したウイリアム・シェイクスピア (William Shakespeare) 没後四〇〇年がもうすぐ来ようとしている。世界最高の詩人・劇作家あるいは劇聖と謳われながら、シェイクスピアに関しては謎めいたことが非常に多く、彼について本当に分かっていることは、大まかに言えば、「Stratford-upon-Avonで生まれ、その地で結婚して子供三人をもうけ、俳優兼劇作家となり、晩年は故郷に錦を飾り、手厚い遺言書を作成し、五二歳で死んだ」ということだけである。シェイクスピアは少なくとも三冊の詩集と三七〜四〇篇の芝居を書き、一〇〇万語近い言葉を残したのに、明らかに自筆と見られる言葉は、たった一四語しか残っていない。一六世紀後半の当時はまだ綴り方が確立していなかったために、名前の綴り方が全部ばらばらのサイン (Wilm Shaksp. / Wm Shakspe. / Wilm Shakspe. / William Shakspe. / William Shakspe. / William Shakspe. / William Shakspe.) が六つ (これで一二語) と、遺言書に

ある by me (私が書いた) の、計一四語である。シェイクスピアの存命中に彼の人物像を文字で説明した記録は一つもない。初めて彼の人となりを描写した文章——「彼はハムサムで、体つきもスマートな男だ。一緒にいて楽しく、当意即妙で洗練されたウィットの持ち主であった」——は、彼の死後六四年も経ってから歴史家のジョン・オーブリーが書いたものだが、オーブリーが生まれたのは、シェイクスピアが死んだ一〇年後である。

シェイクスピアの没後、彼の謎を解くために、四〇〇年近くに亘って英・米を中心に世界中の学者・研究者たちが調査研究を積み重ね、様々の憶測を交えてシェイクスピアの足跡を辿って来た結果、彼の実像にかなり近いと推測される姿が刻まれているが、それでも、今なお、シェイクスピア別人説 (すなわち、ストラットフォードで生まれ育ち、ロンドンで俳優をしていたシェイクスピアと、数々の有名な芝居を物したシェイクスピアとは、別人物であるとする説) が矢継ぎ早に公にされている昨今ではある。シェイクスピアについて新しく発見された例として、例えば、①ほんの一〇数年前に、シェイクスピアの母方の実家それ自体が、それまでそうだと思われていた家の、本当は隣の家であった、②シェイクスピアの死後描かれた肖像画は一六二三年に出版された全集本である第一フォリオ版に掲載されたもの (図一) など数点あるが、死後ではなく、彼が生き

ていた時に描かれた肖像画(図二)が発見された(本年四月)、③シェイクスピアが書いたかどうか疑問視されていた劇 *Edward III* が、彼の先輩作家 *Thomas Kyd* との共作であることが、何と学生のカンニングを見破るために製作された「カンニング発見器」を利用して明らかにされた(本年一〇月)、④同じく彼が書いたかどうか疑問視されてきた *Cardenio* (一六一三年五月宮廷で上演の記録が残るシェイクスピアと彼の後輩作家ジョン・フレッチャーとの共作で、『ドン・キホーテ』の一部を元に書かれた芝居)を巡ってアクシオン推理小説がハーヴァード大学の女性シェイクスピア学者によつて書かれ (*Jennifer Lee Carroll, Intervred with their Bones*: New York: Dutton, 2007. 日本語訳『シェイクスピア・シークレット』二〇〇九年)、シェイクスピアオックスフォード伯爵説を巡って展開する大胆な小説として大評判になったとか、そのようなことが今なお取り沙汰されている。シェイクスピアはまだまだ *mysterious* な、あるいはロマン派の詩人コールリッジの卓抜な言葉では、“*myriad-minded*”な詩人・劇作家であることを止めない。

*

シェイクスピアが(ほとんど)一人で書いたとされる三七篇の芝居の中でも、とりわけ有名な芝居『ハムレット』

には、デンマークの王子で主人公のハムレットが舞台上にひとり残つて独白する台詞が七箇所ある。いずれの独白もハムレットのその時の真実の思いを観客・読者に教える重要な機能を果たすが、ここでは、最も有名な「第四独白」の解釈、とりわけ広く人口に膾炙した冒頭の一行を巡つて考えてみよう。

第四独白は第三幕第一场五六行目から始まり九〇行まで及ぶが、その冒頭数行を原文で引用してみよう。

Hamlet: To be, or not to be, that is the question:

Whether 'tis nobler in the mind to suffer

The slings and arrows of outrageous fortune,

Or to take arms against a sea of troubles

And by opposing end them.

(ハムレット:)

どちらが気高い心にふさわしいのか。じつと

耐え忍ぶことか、非道な運命の矢弾を、

それとも海なす苦難に武器を取つて立ち向かい、

戦つて止めを刺すことか。 . . .)

少なくとも、英語の文章で、この独白の第一行目ほどよく知られている一文はないであろう。しかし、これはまた、短音節語を連ねた単純な文(最後の“*question*”は、余韻を

持たせるため、意図的に女性韻にしてある)であるように見えながら、極めて難解な意味を秘めた一文でもあるのだ。

河合祥一郎訳『新訳 ハムレット』(角川文庫、二〇〇三年)の「解説」に拠れば、明治以降、公にされたこの一行の日本語訳は、何と四〇種類あるという。河合訳の後、大場建治『対訳ハムレット』(研究社、二〇〇五年)が付け加わったので、さらに増えたことになる。

明治になってから最初の日本語訳、一八七四年『ザ・ジャパン・パンチ』掲載のチャールズ・ワークマン(?)訳「アリマス、アリマセン、アレワナンデスカ」はご愛敬だとしても、その後の、外山正一訳の「死ぬるが増か生くるが増か 思案をするはここぞかし」(一八八二年『新体詩抄』所収)を手始めに、何度か訳し直しをし、初めてのシェイクスピア全集を翻訳出版した坪内逍遙の「存なからふか、存あへぬか、それが疑問じゃ」(一九〇七年)、「世に在る、世にあらぬ、それが疑問じゃ」(一九三三年)から現在に至るまで、^{“to be”}の解釈は、次の三つの意味に分かれる。(その他、浦口文治のユニークな訳、「どっちだろうか。―さあ そこが 疑問」一九三四年があるけれど。)

- ①完全自動詞の意味 = 「存在する」 “to exist”
- ②不完全自動詞の意味 = 「〜になる」 “to become”

③辞書(OED)にはないが、コンテキストから割り出した意味 = 「する」 “to do”

これまで公刊された四〇数種類の日本語訳の内、「生か死か」、「存在するか、しないか」、「世にある、世にあらぬ」、「あるべきか、あるべきでないか」などヴァリエーションはあるが、①の意味に解釈した訳が大半を占める。そしてそれは、最近の河合訳「生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ」まで連続と続いている。(これは余談だが、河合は坪内の遠戚なので、先祖帰りしたとも言える。)

これに対して、②の意味に解して、画期的な訳を出したのが、坪内について二人目のシェイクスピア全集を翻訳出版した小田島雄志である。それは「このままでいいのかわ、いけないのかわ、それが問題だ」(『ハムレット』白水社、一九七二年)という訳だ。これは二〇〇〇年に出た小菅隼人の「これでよいのか、いけないのか、どうしたらよい」に受け継がれているが、他には類例がない。③の意味に初めて解釈し、「やる、やらぬ、それが問題だ」と訳したのは、一九六六年に筑摩書房の「世界文学全集一〇」所収の小津次郎訳『ハムレット』である。この解釈を継承したのは、「するか、しないか、それが問題だ」と訳した、当代きつての芝居通で、河合と共著で詳細な『ハムレット』注釈本を出版した高橋康也である(一九九二年)。

最新の大場訳は、「存在することの是非、それが問題としてつきつけられている」とし、意味的には①を取るが、生硬な哲学的意味付けをして、原文の短音節語を連ねた非常にシンプルな英語を如何にも難しげな日本語にしている。これは言葉の感覚というより、コンテクスト的に解釈した一例で、思い切った訳ではあろうが、原文とはやや懸け離れていると言わざるを得ない。

これらの解釈を踏まえたうえで、あえて私は、意味的には②の解釈を取りたい。その根拠について、以下で述べていきたい。

さて、『ハムレット』の冒頭の台詞は次のようである。

I.1. Enter Barnardo and Francisco, two sentinels

Barnardo: Who's there?

Francisco: Nay, answer me. Stand and unfold yourself.

この場面では、Franciscoが先に夜警に立ち、それを知っているBarnardoが交代に来たのだから、後者は人影が見えたら、それがFranciscoであることは察しがつくはずなので、「Who's there?」と誰何するのは、Barnardoではなく、Franciscoが言わなければならない。もちろん、Barnardoは連

夜続けざまに出現している先王ハムレットの亡霊が出て来はしないかと恐る恐る見張りを交代に行くので、人影を見たとたんに怯えてこの台詞を吐いたのであろう。しかし、幕開きの台詞が「だれだ、そこにいるのは」で始まるのは、人間の、あるいは世界のidentityを問うこの芝居全体の縮図となつているとしばしば評される。

現に、シェイクスピアの芝居には、identityの揺れを問題にする作品がいくつも見られる。例えば、船が難破したため異国イリリアに漂着したヴァイオラ (Viola) 姫は女性の操を守るため男装してこの国の公爵オーシーノ (Orsino) に仕え、「I am not what I am.」「わたしは本当のわたしではない」(Twelfth Night. 3. 1. 140)と云うし、本音・本心を隠し通して、あくまで「honest」な人物を演技する悪党イアゴウ (Iago) も「I am not what I am.」「俺は俺じゃない」(Othello. 1. 1. 66)と独白する。考えてみれば、「I am what I am.」というのは、「神」の言葉であり、「神」そのものを指す言葉である。人間である限り、identityの揺れを経験するのは避けられないことなのだ。

このことを踏まえて、私はこの一行の「to be」の意味を小田島式に②の意味に取るが、しかし、この行は、ハムレットが自らのidentityを問う意味に解釈したい。「わたしはわたしなのか、わたしでないのか、それが問題だ」という意味に解釈したいのだ。もし、「わたしがわたし」、つま

り先王ハムレットの息子ハムレットであれば、亡霊となつて甦つた父の命令を実行し、現王で叔父、かつまた実母の夫クロウディアスに暗殺された父の復讐を是が非でも果たさなければならぬ。これに反して、「わたしがわたしでなければ」、父ハムレットの子ハムレットではないので、父に命じられた復讐を果たす必要はなく、憎らしい獣のごとき叔父に身を任せた愛する母の裏切りを呪詛しつつ、神に禁じられて自殺もままならないで、忸怩たる思いを抱いたまま、悶々として生きていくだけだ。

以上の私の解釈を含めて、*to be* の四種類の解釈を上ハムレットの台詞に即して図示すれば、次のようになるであらう。

- ① *to be* (存在する、生きる) = *to suffer* / *The slings and arrows of outrageous fortunes*
not to be (存在しない、死ぬ) = *to take arms against a sea of troubles* / *And by opposing end them*
- ② *to be* (ハジメテハジメテ) = *to suffer* / *The slings and arrows of outrageous fortunes*
not to be (ハジメテハジメテ) = *to take arms against a sea of troubles* / *And by opposing end them*
- ③ *to be* (対峙) = *to take arms against a sea of troubles* / *And by opposing end them*

- not to be* (やらぬ) = *to suffer* / *The slings and arrows of outrageous fortunes*
- ④ *to be* (わたしである) = *to take arms against a sea of troubles* / *And by opposing end them*
not to be (わたしでない) = *to suffer* / *The slings and arrows of outrageous fortunes*

ハムレットは復讐に狐疑逡巡しながらも、「わたしはわたしだ」と自覚し、河合が『謎解き「ハムレット」―名作のあかし』（三陸書房）で言うように、「雀一羽落ちるにも神の摂理がある」と悟って、結局は、「神の使者」へと変貌する。理性と行動を兼ね備えたルネサンス的理想像ヘラクレス的役割を果たすことで、自らは死の国へと旅立つことになるが、彼が自らの夢を託したフォーティンbrasに王位を譲り、新しい秩序をデンマークの国にもたらしことになる。

引用は、Harold Jenkins(ed.), *Hamlet* "The Arden shakespeare". London: Methuen, 1982 に拠る。



図2 2009年4月に新らしく発見したと発表された肖像画

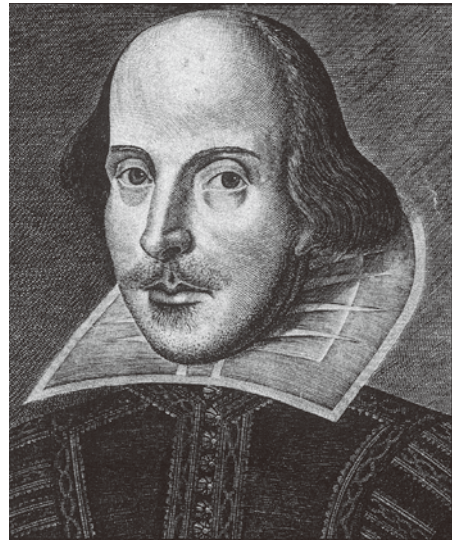


図1 第1フォルオ版の肖像画